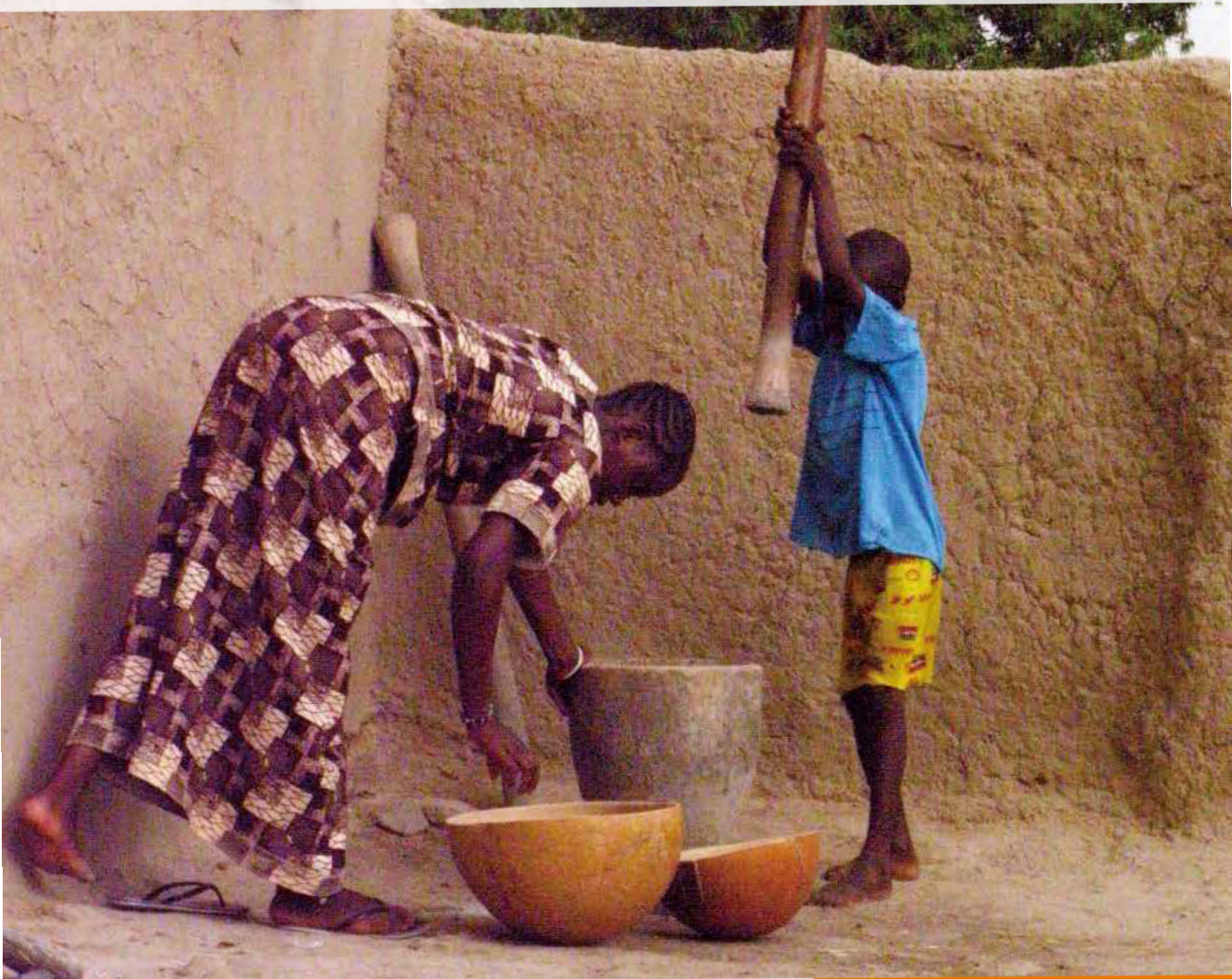


2023年度(令和5年度)
カラ事業報告書



トウジンビエの脱殻をする姉と弟

はじめに

本年2024年1月1日、能登半島で最大震度7の揺れを観測する大地震が発生しました。TVに映し出される状況に目を覆いました。そして多くの方が被害を受け、お亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り致します。カラの会員の方々も何人か石川県にお住まいですが、大きな被害はなかったようです。

日本ではいつ起きかわからない自然災害に恐怖を感じておりますが、マリ共和国のカラの支援現場でもイスラム過激派からの襲撃を受け、村の人たちが不安な日々を過ごしています。災害の種類は違いますが、住民が安心した日常を送ることができないのは同じであるように思っています。

首都のパマコにいるカラのスタッフのラミンジャワラは、いまだに活動現場の村を訪問することはできず、村のスタッフとは安全な町で面会し日本からの連絡を伝えています。

マリの現状について

■厳しい電力状況

マリでは連日、気温が40度以上でしかも降水量が少ないため、36時間から48時間も停電が続いています。現在は毎日18時から24時まで停電していて、これがいつまで続くかは不明です。そのためマリとの業務連絡は思うようにできません。

パマコでは、停電解消に向けて現在主流の軽油による発電に加え、太陽光発電を導入するため、ロシアと中国からの資金援助で工事を行うことになったということです。しかし、工事が完成して住民に電気を供給できるまでには18～24カ月を要するので、人々の苦労はまだ続きます。また、ロシアがマリに原子力発電所の建設を進めているという新たな問題が浮上しています。

■バンバラ語が公用語に

部族語のバンバラ語がマリの公用語になりました。現在の公用語であるフランス語もそのまま使われるので公用語が2種類になるということです。

■日本から米を支援

日本政府は、2,777トン(約3億円分)の米を、マリ農産物公社(OPAM)を通してマリの人たちへ供与しました。この米をOPAMは国民に1サック(100kg)あたり18,000cfa(約4,000円)で販売しています。これは非常に安価ですが、地方の人たちへも行き渡るのか、また中間搾取があるのではないかと考えてしまいます。

■マリ政府が国民と大集会を開催

マリ政府は5月、国民との大集会を開き、現在の危険で不安定な状況の解決について国民の希望を聞きました。国民からは次のような声が上がりました。

- ・イスラム過激派(ジハチスト)の襲撃を防ぐため、軍による警備を5年間延長すること。
- ・クーデターを起こした5人の軍人の名前を明らかにすること。
- ・新たな民主的な選挙を実施すること。
- ・国民が平和に安全な日常生活が送れるようにすること。
- ・電力、食糧不足の解決。

カラ現地活動のいま

カラ東京事務所が杞憂するのはやはり村の治安です。

カラの活動現場へのイスラム過激派(DJIHADIST:ジハチスト)による襲撃は現在小康状態ということですが、マリ国内の他の地域では収まっていません。

カラの活動現場ではトゥグニ村のような郡庁のある村にジハチストが住みつき村を統治・支配、すべてにおいて郡長や村長とジハチストが話し合っていて決めているとのこと。もし新事業を始めるとしたら、ジハチストの合意があれば可能という異常な状況です。ジハチストにとっても日々の食料や医療が必要なため、それらがいささかでも得ることができる村が襲撃の標的になったようにも思われます。

スタッフの報告によると「カラが野菜園や産院・診療所を設置したから村が襲撃された」とのことで、非常に複雑な気持ちです。しかし異なった思想を持った人たちが、暴力的な方法ではなく互いに話し合い共生が進むことで、穏やかな日々が得られるようであれば、幸いなことかもしれません。

このような状況の下、今は村の数少ない公共施設である産院や識字教室・小学校、その他カラの支援による施設はジハチストにコントロールされながらも、ゆっくりですが活動を進めています。表面的には穏やかに過ごしていると報告されていますが、いつまたイスラム過激派の襲撃があるかわかりません。カラの活動地域内の多くの村では学校も野菜園もなく困窮している現状を把握しているだけに歯がゆい思いです。現在も管轄内の村々から次のような要請が届いています。

要請のあった村名	要請事業
ブラジェ村	女性活動センターの建設
オーロンコトバソコロ村	幼稚園 1か所(小学校低学年と共同使用の為3クラス、WC、教官室等)。 太陽パネル汲み上げ式井戸の設置 1基。
ジャニコロ村	小学校新設1校。1haの女性野菜園1ヶ所
ジャマニバサラ村	小学校新設1校。2haの女性野菜園1ヶ所

2年前に建設中の産院が破壊されたブラジェ村では、産院はないものの、助産師が人々のために働いています。この産院建設について、2023年にマリ政府から通達がありました。「今後、産院を建設する際は、今までの土レンガを用いた建設は禁止とし、全て鉄筋コンクリートで建設すること。そして医者常駐させること。」となりました。しかし、これは地方の村にとっては現実的ではありません。誰が医者の高給を支払い、医者に適した住宅を準備できるのか? とても村では負担できません。このため、今後産院や診療所の開設はカラのようなNGOには不可能です。ただし過去に開設した産院や診療所は、そのまま診療の継続が許可されました。

2023年度 カラ現地活動報告

年度初めの頃は現地の人々の食糧不足が大きな問題でしたので、カラが関わっている現地の村への食料支援を考え、見積もりを取り寄せました。しかしこれには莫大な資金が必要で、それらの運搬も襲撃の標的にされるのではないかと考えました。この支援に必要な資金規模はNGOの支援を超えていました。カラが関わっている村は90カ村近くに及びます。しかし、特定の村にだけ食糧支援を行うようなことはできないので、食糧供与はあきらめ、今できる範囲での緊急支援を考えました。

その結果薬品不足や産院従事者への給与の捻出に困っている状況から、その資金を寄付することにしま

した。対象はカラが開設したトゥグニ及びドゥンバコミュン(郡)の11カ村の産院・診療所です。ただ日本から送金した資金をすぐに各産院・診療所へ届けることは危険を伴うと判断しました。そこでカラのアシスタントスタッフのバジェファネとムーサジャラを、襲撃が起きていない時を見計らってクリコロ町まで呼び出し、そこにバマコスタッフのラミンジャラが出向き、資金を渡しました。彼らは非常に気を遣ったと思います。お金を持っていると知れたら、何が起きるかわかりません。危険を伴います。襲撃された村の人が生活に困って強盗に変わることもありうるからです。

11カ村の産院・診療所にはこのように安全を考慮して2回(2024年2月と5月)に分けて1箇所あたり300,000cfa(約70,000円)の緊急資金を供与しました。各産院・診療所は下の表のように用途を報告してきました。

イスラム過激派による村への襲撃が人々の出足をくじき、産院での出産前・後検診も来る人が少なく、学習会も中止になっているようです。

産院・診療所名	管理代表者名	資金の用途
バブグ産院・診療所	スマイラ ジャラ	薬品の購入費
シラブレ産院・診療所	ムサ ジャラ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
ニャマコロブグ産院・診療所	ヌム ジャラ	建物修理費用
ドゴニ産院・診療所	アマドウクリバリ	薬品購入費
カチャラ産院・診療所	ズマナ コネ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
キバン産院・診療所	ユースフトラオレ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
ママブグー産院・診療所	バラ ケイタ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
コニナ産院・診療所	バラ ダンベレ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
モバ産院・診療所	ンゴロトラオレ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
コニナブグー産院・診療所	アダマ サンガレ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)
ヌムブグー産院・診療所	バカリ サンガレ	助産師・看護師給料(5カ月分に相当)

国内活動報告

2023年12月10日、恒例のカラのチャリティコンサートを開催しました。当日は100人以上の方が会場となった日本歯科大学富士見ホールを埋め尽くしてくださいました。

今回は原田康子さんの歌だけではなく、マリ共和国についてより深く理解していただくために、前京都精華大学学長であったウスビ・サコ氏をお招きしてマリの日常の暮らしと、カラの支援活動について代表の村上と対談しました。司会は1993年に村上を訪ねてマリのマディナ村に滞在した宇佐見靖子さんをお願いしました。NEWSポストセブン(小学館)に掲載された対談に関する記事を以下、紹介します(文:宇佐見靖子)。

開業医を辞めてマリ共和国でボランティア?

カラ代表、村上一枝さんが、日本初のアフリカ人学長ウスビ・サコさんと語る

カバ共和国ワニ川市出身ってどこ?

「マリというのは、動物の『カバ』を意味します。首都のバマコは『ワニがいる川』という意味です。つまり、私は

カバ共和国ワニ川市出身です」。軽快な関西弁でサコさんは会場に語り掛けた。関西のノリとはちょっと異なる反応に苦笑いだった。

マリ共和国は、アフリカ大陸の西側にあり、1960年にフランスから独立。国土は日本の約3倍で、その約3分の2はサハラ砂漠が広がり、あとはサバンナ(熱帯草原)に属している。人口は2259万人(2022年現在)だ。世界最貧国の一つとされている。

「サコさんと初めてあったのは忘れもしない1995年の1月1日。なんの予告もなしに、バマコのカラの事務所に3人の日本人と突然やってきたのです」とそして「1月元旦に訪問とは、全くの礼儀知らず」と村上さんはサコさんとの出会いを振り返る。すでに、マリの農村での支援活動を意欲的に進めていた村上さんに、サコさんは親近感を抱いていたのだろう。

というもマリでは、自分の家に知らない人が住んでいたり、同郷の知り合いの知り合いがいきなり訪ねてくるのは、日常茶飯事らしい。「バマコのが家には、お父さんの田舎の隣の家の知人といった人が20~30人ぐらい住んでいたし、1年間住みついている人もいました」とサコさんはざらりと言う。そして誰もが、赤の他人なのに「勉強のことだとか、生き方について、とやかく言ってくる」。ちょっと一昔前の日本の長屋の風景に似ているようだ。

そんなマリのエピソードに加えて、村上さんは「マリでは挨拶もすごく長いんです。こんにちは、だけでは終わりません」と語る。「元気ですか?」「昨夜はよく眠れました?」「家族のみなさんは元気ですか?」「近所のみなさんは元気ですか?」…と続く。しかも5人いれば、すべての人に同じように挨拶するというのだ。サコさん曰く「挨拶は共存社会の基本」らしい。

これほど楽しく夢のある仕事はない

そんなマリで、なぜ村上さんはボランティアを始め、支援活動を続けてきたのか。その30年にわたる想いが、2024年2月22日に発売された自身のエッセイ『悩んでも迷っても道はひとつマリ共和国の女性たちと共に生きた自立活動30年の軌跡』(小学館)に生き生きと綴られている。

『アフリカへ単身旅立つ時は、「この先はない。これで一生を終えよう」と覚悟していた。50歳を目前に、ゼロへ向かっていく感覚を無意識に持っていたのかもしれない。だから、貯金を切り崩して私費を投じ、お金がなくても夢に向かって歩いてこられたと思う。』

村上さんの支援活動は、井戸掘りから始まり、自然環境の保護、識字教育と学校教育の普及、村の女性を



当日の対談の様子



マディナ村の女性たちと。1991年頃

助産師に育成と産院開設、病気予防と衛生知識の普及(エイズやマラリアの予防、トイレの建設、健康普及員の育成など)、女性の収入獲得のための適正技術(裁縫や野菜園の設置など)の指導といった日常生活に必須なことを中心に、多岐にわたる活動をこれまで約30年間、マリの80か所以上の村で行ってきた。

村の人たちの信頼を得た一番の要因は、村上さんが事業面において約束をきっちり守っていたことに尽きる。皆に説明して行ってきた活動が、約束通り収入源になった。衛生面の向上により、安心して生活ができるようになった。文字を書けるようになった人を活動のリーダーにするなど人々の喜びと満足感につながった。

「ムラカミは大統領よりも信頼できる。約束したことを守るから、とお世辞とも思われることを言ってくれた時は、思い上がりかもしれないが嬉しかった」と村上さんは笑う。

夜のサハラ砂漠をベースキャンプのある村まで単独行をしたり、長い間、根深い不仲関係にあった村々が村上さんたちのボランティア活動の影響で解決の手打ち式をするに至ったり、女性の地位向上を活動の一環としているのに、一夫多妻が許されるお国柄ゆえのスタッフの理不尽な要望を拒否して大げんかをしたり。村上さんがマリの慣習や文化の違いを受け入れ、村の人たちと交流を深めることで、人材育成や事業の成果につながっていくエピソードにも引き込まれる。

そして、今、こう振り返る。
『もう一度人生を巻き戻すことができるとしても、私は迷いなくマリでの支援活動を選ぶ。これほどまでに楽しく夢のある仕事はない』。

支援のモットーは、村の人々が自分たちの力で生活を切り拓けるようにすること
村上さんの支援活動のモットーは、「村の人たちが健康で幸せな生活を自立して構築するよう促し、できるだけ外部からの支援に頼らず、村の人自ら努力すること」だ。時には厳しく村の人たちと議論し、理解し合いながら進めてきた。

サコさんは村上さんについて次のように述べる。
「ケチなんですよ。村上さんは。欧米の支援活動団体は結構、無駄遣いすることがあって、村の人たちもいい思いをするのですが、村上さんは村の人たちをしっかりと働かせて、その報酬を支払う。でもそれがとっても大事なんです。自分たちで頑張るということを村上さんから教えてもらったのだと思います」。
その言葉に、「ケチと言われてもいいけど、本当はもっと別の言葉がいいわ」と村上さんははっきり言いながら、「でも、お金がなくても自分たちで工夫することをこの30年続けたので、村の人たちが自分の力で生活を切り拓いていけるようになったのよ」と述べた。

村で建設中の産院がテロの襲撃を受けた—マリの厳しい現実

「2023年6月、マリの現地スタッフから突然電話がありました。『ムラカミ、ブラジュ村で建設中の産院がイスラム過激派に破壊された。左官も村長も殺された』。耳を疑うような恐ろしい内容でした」。村上さんは今のマリの厳しい現状について語る。その後のスタッフからの報告では、今も危険な状況は続き、村では農作業もできず、村人たちは知人を頼って逃げているとのことだ。

マリは2017年以降、イスラム過激派組織によるテロや襲撃事件が多発し、とうとうカラの活動地域も標的とされ、完成間近の産院が襲撃を受けた。イスラム過激派の言い分はこうだ。「モスク(イスラム教の寺院)以外は建設してはダメだ」。

サコさんは、マリの首都バマコに住む家族とも連絡を取り合っているなか、「マリは現在、暫定政府で選挙がいつできるかまだわからない。さまざまな外的要因も関わって、とても難しい状況。イスラム過激派もいったい何を求めているのかもわからない」と言う。ただ、そのようななかでも村の人たちはそこで生きていかなくてはならない。継続的な支援が必要だ。「マリの人たちは村上さんを待っています」と力を込めた。

「物が壊されても、村の人々は自分たちで木や野菜を植えて生活していくという方法を、もうすでに知っています」と村上さんは述べる。特に女性たちは、縫製品や野菜の販売で自ら稼ぐ力を培い、強くなった。女性のパワーこそ社会をつくる。村上さんは今、マリの人たちが自ら再興する力を信じて、後方支援に向けて奔走している。状況が改善すれば、また現地にも赴く予定だ。マリでの挑戦は、まだまだ終わらない。



ウスビ・サコ(佐古 ウスビ)

京都精華大学全学研究機構長、日本国際博覧会協会副会長

1966年マリ共和国生まれ。京都在住。高校卒業と同時に国の奨学金を得て中国に留学。北京語言大学、南京東南大学を経て91年来日。99年、京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。博士(工学)。専門は空間人類学。「京都の町家再生」「コミュニティ再生」など社会と建築の関係性を様々な角度から調査研究している。バンバラ語、英語、フランス語、中国語、関西弁を操るマルチリンガル。京都精華大学人文学部教員、学部長を経て2018年4月から2022年3月まで、京都精華大学学長を務める。日本初のアフリカ人学長となる。

2023年度収支決算書

収入の部		支出の部	
2023年度会費	670,000	マリ事業費	
寄附金	465,350	建設費・管理費・人件費	1,285,984
助成金(WF基金)	200,000	日本事業費	
販売収入 (カラコンサルタント 切符代金)	998,000	管理費・コンサート経費・交 通費・通信費・事務用品費・他	420,093
預金利息	4	広報費・ 年次報告書作成費 (印刷・レイアウト・郵送費)	45,447
		マリ事業費送金時銀行手数料	15,000
		会費入金時手数料 (ゆうちょ銀行)	5,500
計	2,323,354	計	1,772,004
前年度から繰り越し	651,961	次年度へ繰り越し	1,213,301
合計	2,985,315	合計	2,985,305

三菱UFJ銀行年度末残 704,507円
ゆう貯銀行 年度末残 463,214円
年度未現金残 60,580円 (使途不明金 14,990円)

カラ会計 監査担当
R6.6.24 承認
神心明子
滝口洋子

2023年度日本国内での活動

- 2023年 10月30日 NCAF(日本中近東アフリカ婦人会)主催バザーに参加
12月10日 カラチャリティーコンサート開催 日本歯科大学富士見ホール
2024年 3月31日 日本歯科大学 D Muse にて活動紹介

悩んでも迷っても道はひとつ

マリ共和国の女性たちと共に生きた自立活動30年の軌跡
村上一枝著 小学館

マリの農村におけるこれまでの30年間にわたる支援活動や村上個人の経験などが一冊の本になりました。NGOの在り方を模索しながら現地の人たちと関わったことなど、多くが綴られています。思いがけないことに、2024年第72回日本エッセイストクラブ賞の最終審査の4冊にノミネートされました。



チャリティーコンサート「かけはし2024」開催のお知らせ

2024年12月1日にカラのチャリティーコンサートを開催予定です。昨年のコンサートで行ったサコさんとの対談が好評でしたので、今回もまたゲストにサコさんをお招きします。皆さまのお越しをお待ちしています。

編集後記

マリ共和国は、現在も不安定な政局のままですが、解決のために努力している姿が伺われます。本年こそ、大統領選挙が行われる予定のようです。公正な選挙の実施を期待したいと思います。カラの活動は縮小しましたが、2023年度の報告書をお届けします。

カラ西アフリカ農村自立協力会 <http://ongcara.org/>

代表:村上 一枝

東京事務局

〒177-0054

東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101

Tel:03-3929-5767

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096

文責:村上 一枝 編集:宇佐見 靖子

※ご注意ください:任意団体となり会の名称は「カラ西アフリカ農村自立協力会」となりました。